

---

# ロイヤル・ミルク・チョコレート/銀魂/沖神

槻夜 七瀬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ロイヤル・ミルク・チョコレート／銀魂／沖神

### 【Nコード】

N3163F

### 【作者名】

槻夜 七瀬

### 【あらすじ】

銀魂高校にて。恒例のクラス替えをし、結果を見て「嘘」と呟く神楽と沖田。クラスが離れてしまった二人には、言いようのない苛立ちが募っていく……

**(前書き)**

3 - Zです。クラス替えとかあります。

PV2000突破ありがとうございます！

「嘘」

ぽかん、と口を開けたまま、神楽は言葉を見失う。

「嘘だろイ……」

いつもと同じ様な表情を崩すことなく、沖田は呟く。

二人の立つ位置は遠く、視線は手元だった。

握られているのは……クラス割り。

ショックをどうにか隠そうとする神楽に気付いたのか、沖田はそちらへ視線を移した。

「……………」

「……………」あ

やっと、目が合った。

神楽は僅かに、沖田を睨んでいるようだった。

「……何ヨ」

「いや、別に」

会話じゃない。

本当はもっと長く話せるはずだった。  
何故、会話すら出来ないのか。

クラスが離れたのだ。

「……はあ。やあっとチャイナと離れられたね」

「！ わ、私だって、お前と離れられてせいせいするネ！」  
繋ぎたかった。

きつとこれからは、親しく会話をするこもなくなってしまうのだ  
から。

だから、せめて………今だけでも。

けど。

改めて溜め息を吐いた。

振る内容を明らかに間違えた。

何であんなこと言ったんだらう。

裏腹なことしか言えないのには、ワケがあるとも思えなかった。

結局、それからというものの、ただただ怒鳴り散らすばかりで、まともな会話なんて言えない。

「っあ　　！　信じられないネ！　人がショック受けてる時にそんなこと言うかフツー！？」

「ん？　ショック受けてたんですかい？」

びくりとして慌てて弁解する。

「ちげえヨ！　だって…銀ちゃんはお前のクラスの担任だし……」

頬が引きつるのを感じた。

銀ちゃんは………か。

「あ、そ。そりゃあ残念でしたねィ。せーぜー休み時間にも押し



かけてこいよ」

意地の悪い笑顔を向けた。

内心は苛立ちがピークだった。

背を向けて廊下を歩き出した。

小さく、出来るだけ最小限に苛立ちを発散するかのように、舌打ちをした。

この行動の中心にいるのは、アンタだけなのに。

それを少しも感じ取らない彼女に、幾度も苛ついた。

けれどその感情を伝えようとしないうち自分も自分で。

「……………バカヤロー」

呟いた方がいいが、それが誰に対していったモノなのかなんて解りはしない。

「……バカヤロー」

神楽が同時に呟いたのなんて、聞こえるわけもない。

それから、お互いの顔を見ることもないような生活が始まった。

会つとすれば教室移動、休み時間に廊下で擦れ違っくらいだ。

ああ。と沖田は天井を仰ぎ呟く。

足りない。

生まれ持った容姿のお陰で、友達に困ることはない。  
が、だ。

自分で解る。この満たされない感覚。

「……どーした、総悟」

同じクラスになった土方が、声を掛けた。

「……別に。ちょっと屋上行ってきまさら」

良い天気だった。

前は一緒に此処でサボっていたのに。

今は一人だ、と日光を全身で浴びながら思う。

一人。

その単語に安心感を覚えた。

今なら言えるのだろう。

きつと、神楽アイツに言えない、自分の気持ちアイツが。苛立ちが。

「……………好きだ」

寝そべると太陽が眩しい。

目の上に右腕を乗せて、照れ隠しでもしているつもりなのだろうか。

「だから嫌なんでイ。アンタが銀八のこと話すのも……………俺の気持ちに気付かねえのも」

拳に力を入れた。

「同じ教室にいれねえのも」

ガタッ

入り口の辺りから、大きな物音がした。

「!?!」

慌てて起き上がって確認する。

「だっ……………!?!」

「あ」

「……………え」

お互いの視線が絡んだ。

気まずい空気が肺の中に流れ込んできた気がする。

「ち、チャイナ……………?」

震える指で指す。

「ちっ…違つアルよ！？ お前が屋上（うゑ）にいとおもっ……………！！！」

自分の発言に驚いて口を噤む。

「たまたまネ！ ホント、偶然来たら」

瞬間、走り出して神楽を抱き寄せた。

「お、オイ……………」

「良い。偶然でも何でも良いから……………。アンタ、聞いてたんだろイ」

「き、聞いた……………アル……………よ？」

「じゃあ解つたらイ」

「わ…解つたつて、何がアルかつ」

「……………まだ、解つてないんですかイ」

じっと神楽を見つめた沖田の目は、いつになく真面目だった。

「！」

にや、と笑った沖田は、呆然としている神楽に訊いた。

「……………解った？」

顔を真っ赤にして、神楽は頷く。

「もっとまともな伝え方、なかったアルか」

ふて腐れた口調だが満更でもないような顔で、神楽は言う。

「だって、アンタ鈍いんですもん」

「に、にぶ………?」

「それに気付かないのを、鈍いって言うんですア。…銀八とクラスが違つとか言うしねィ」

「…ああ、それは………て、照れ隠しって奴ヨつ！ つーか、お前だつてそうだろ！ ……新しいクラスであんなに人気なのが、女子と仲良いのがムカツクアルよっ…!？」



「…そりゃあ、悪かったねィ」

「……………今度から」

「ん？」

「今度からは…一緒に昼食食べるアル」

屋上からの階段を降りながら、不意に神楽が言った言葉に、沖田は驚く。

ふ、と嬉しそうに微笑して天井を仰ぎ見た。

「気が向いたら、ねィ」

「はあっ…？」

「アンタが呼びに来てほしいって言うんなら、行ってやっても良いですけどねィ」

神樂は嬉しそうに頷いた。

あんなに満たされていなかった彼の中は、不思議と満たされていた。  
それも、とびきり甘く、温かい何かで。

「神樂ア、昼飯食いに行くぜイ」

「うんっ」

甘い、甘い、君の言葉で。  
終

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3163f/>

---

ロイヤル・ミルク・チョコレート/銀魂/沖神

2010年10月9日02時55分発行